

赤ひげからの伝言

～昭和・平成・令和を馳せる医療者の想い～

あすけびょういん
チャンネルにて
2/21授賞式の特別動画を
公開しています！
ぜひご覧ください！

このコンテンツでは、早川先生が院長時代の様々な執筆物のアーカイブスを掲示していきます。各年の年始の挨拶・院長日記そして早川先生の医療や地域に対する哲学が記されています。私自身、改めて読み直してみても赤ひげの先見の明に感服いたしました。そのDNAを引き継ぐ者として参考にしつつ皆様と共有し後世に残そうと思います。以下のカテゴリーに分けて順次、掲載をして参ります。

それでは、**赤ひげ・早川ワールド**をお楽しみください!!

第9代 足助病院長 小林真哉

※赤ひげこと、早川富博名誉院長が第8代の足助病院長となります。



赤ひげからの 年始の想い



早川先生が院長時代の各々の年の年始挨拶2002年から2019年まで綴られています。`そんな時代もあったねと、世相を反映した記述も随所に見られます。皆様、昔を思い出してご覧になってください。

掲載中！
該当ページを
表示する



赤ひげ先生の 院長日誌



早川先生が現役院長であった時の時相・想いが綴られています。楽しみながらも、様々な難局を乗り越えた一人の院長の物語です。現役院長の私には、とても参考になり共感する言霊の集合体です。

61～69話
掲載中！
該当ページを
表示する



赤ひげの`足助フィロソフィー`

医療・福祉・介護をいかに継続して地域に提供し続けるかという命題に向き合う現在の赤ひげの哲学です。今後医療が目指すべき視点を既に4半世紀前より、様々な視点で提言し実行されていたことに驚かされることでしょう。ある意味での足助病院フィロソフィーでありバイブルでもあります。我々は、この考えを十二分に咀嚼・消化吸收して血肉として自らの言葉・行動で示していかななくてはならないと心に刻んで日々、励んでおります。

掲載中！
該当ページを
表示する





赤ひげからの 年始の想い



2002年 ―混迷からの脱出―

21世紀の幕明けである2001年は、明るい未来へ向けて希望を示すとは言えない、混迷と不安の中で始まりました。政治、経済、行政、医療などすべての分野での改革が叫ばれるなか、ニューヨークにおけるショッキングなテロによる大惨事はまさに悪夢をみるようでした。その後続いたアフガン戦争。大型ジェット機が世界貿易センタービルに突っ込み爆破炎上するテロの録画を、テレビで何回視たことでしょうか。空爆の映像も日常化され、まるでゲームのようですが、凄惨な戦争の犠牲となった人々の映像は心を暗くし、悲しみを禁じ得ません。主義主張の違いとはいえ、なぜに不毛な争いをするのでしょうか。これまでの価値観、人生観を見直す時期なののでしょうか。すべてのことを、今一度原点に立ち返って点検する必要があるのでしょうか。自分自身の行動の原点は何かを、考えてみるべきなのです。

最近、「知足」という言葉を耳にします。「足を知る」という読みで、パソコンの変換にはない死語に近い言葉ですが、「分に安んじてむさぼらないこと」と辞典にでています。金がすべてで物に溢れ慣れた浪費社会の資本主義が息詰まった反省すべき言葉なのかもしれません。むさぼらなければ社会は進歩してこなかったでしょうが、行き過ぎはいけないのでしょうか。ある程度のところでの満足が大事なのだと思います。ある程度というのが難しいのですが、個人であれば、自分自身を取り巻く社会との間で協調した状態が良いのでしょうか。足助病院は、「安全・安心・満足の医療を提供する」ことをミッションとして掲げていますが、すべての人々に満足を感じていただくことは大変難しいことです。組織である病院の満足はある程度で良いのですが、患者様や病院を支えてくださる地域の人々の満足はある程度ではいけません。常に利用される皆様の立場に立って、日々の業務が考えられるべきです。そのためには皆様のニーズ（要望、意見）を病院はしっかりと聞くことが必要です。聞くのではなく、職員が率先して皆様のニーズを聞き出すという感受性が大事であると思います。原点に戻る、すなわち足助病院の成り立ちの原点をしっかりと見据えて今年も頑張ります。

不安と混迷の中にも、昨年末には内親王が御誕生され、慶賀の極みであります。新しい命の誕生はすべての人々に勇気と希望を与えてくれます。今年は勇気と希望を携えて原点を確認することができそうです。

皆様のご健勝を祈りながら、より一層のご支援をお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2003年 —新たな旅立ち—

明けましておめでとうございます。

昨年巻頭言で記した、「混迷からの脱出」は成功せず、2002年も日本全体が低迷したままで終わってしまった感があります。しかし、日本社会はそれとして、今年の足助病院は「新しい旅立ち」の第一歩を踏み出すことになります。皆様ご存じのように、新しい特別養護老人ホーム建設に向けて、昨年からは病院は工事の連続であります。特別養護老人ホームの敷地確保のために、看護師寮の移転、手狭になる駐車場の増築などが行われ、皆様に大変ご迷惑をお掛けしました。本年は特別養護老人ホーム本体の工事が引き続き行われます。ただでさえ狭い敷地になぜ新たに特別養護老人ホームを建設するのか？病院と直接的に連絡できることが、利用される方々への安心に繋がると考えてのことです。高齢社会が現実である当地域の医療・介護・保健を担当する足助病院は、新しい特別養護老人ホームと連携をとりながら安全・安心のサービスを提供したいと考えています。新しい特別養護老人ホームは全個室で最新のグループユニット形式となります。風香るデイルームからグラウンドで走り回る高校生の姿を見ることが出来そうです。

もう一つの「新しい旅立ち」として、カルテの電子化を計画しています。医療事故防止の新しいツール（道具）として、有効なものであります。また、患者様も参加出来る医療として、地域の診療所、行政や介護関係者との連携に、大きく寄与するものを構築したいと考えています。IT(Information technology：情報技術)の利用は移動に時間がかかる距離的問題を抱かえる当地区こそ必須のものです。これまでも、病院と地区の集会場との間でテレビ電話を使った健康講話、栄養相談、元気アップ体操が実現しています。テレビを通じて家庭に居ながら診察を受けることが出来る、好きな時間に心配事を相談できる、最新の医療情報を見ることが出来る、などなど、夢のような話の具現化に向けて、病院がその発信源になりたいものです。

皆様からの意見・苦情を宝とし、地域で必要とされる病院を目指し、常に「新しい旅立ち」を念頭に努力致します。引き続き皆様のご支援を心よりお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2004年 —新たな旅立ちpart 2—

新年明けましておめでとうございます。

2003年はイラク戦争が始まり、その後も戦争・紛争のニュースは絶えることもなく続き、今年も、これから世界がどのようなになるか想像出来ない混迷状態が継続しそうです。一昨年は「混迷からの脱出」、昨年は「新たな旅立ち」と題して念頭の挨拶としましたが、今年は願いを込めて「新たな旅立ち、パート2」としました。

日本では改革が叫ばれても一向に埒が開かず、混迷から脱出出来ない状態です。しかし、それはそれとして、足助病院は、昨年から継続していた特別養護老人ホーム「巴の里」の完成、電子カルテの導入が完了しました。東加茂地区の高齢化は30%を越え、当地域の医療・介護・保健を担当する足助病院の使命は益々大きくなるものと思います。新しいハード（特別養護老人ホームと電子カルテ）を如何に使いこなしてゆくかが、今年の大事な仕事となります。電子カルテという新しいツール（道具）を手にしたことによって、情報の共有は飛躍的に進み、病院の職員間だけでなく、地域の診療所、行政や介護関係者との連携は大きく前進するものと期待しています。また、新しいシステムを使いこなすことで病院全体が活性化し、その結果、地域の文化的要素の向上に貢献できれば幸いです。

足助病院の理念は「安全・安心・満足の医療・福祉（介護）・保健活動を通じ、中山間部地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域作りに貢献する」であります。医療機関の使命は、病気を治すだけでなく、地域で安心して生活できる基盤づくり、すなわち地域のセーフティネットとしての役割であります。安全・安心できて、満足を感じる素敵な町でなければ住民は集まりません。「まちづくり」の基本は「医療・福祉・保健と教育である」との考えから、職員に対する教育だけでなく、これからは、若い高校生・中学生に対する、愛情ある地域ぐるみの教育活動に、職員一同、積極的に参加したいと思います。

これからも地域で必要とされる、いや、地域の人々が参加する病院を目指し、常に「新しい旅立ち」を念頭に努力致します。引き続き倍增のご支援を心よりお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2005年 —新たな地域からの提言—

新年明けましておめでとうございます。

2004年は、台風の異常な上陸回数とそれによる水害、新潟中越地震など天変地異の連続で、その災害状況が毎日マスコミを賑わしました。全村民が村を離れざるをえなかった山古志村の惨状は、東加茂郡で震災が起きた場合の想像と相重なります。災害に遭われた人びとの一日も早い復興を祈念し、新年を迎えました。

さて今年、東加茂郡は豊田市へ編入合併されます。新しい豊田市となると、今まで培ってきた東加茂郡の良いところが消滅してしまう？益々過疎が進んでしまう？など、心配が多いように感じている人が少なくありません。そういう状態であるからこそ、今年は願いを込めて、年頭の言葉は「新たな地域からの提言」としました。

合併することは色々な制度を豊田市へ合わせることになりますが、一方で、合併は変化を伴いますから、物事を変えるチャンスでもあります。合併の理念の中に、都会と田舎の共生ということが謳われています。田舎と都会を包含する大豊田市が都会と田舎との共生を本当の意味で実践できれば、これまでの日本でできなかったことを為し遂げることになりましょう。そのためには、これから3年間、田舎である東加茂郡から地域づくりに対する多くの提言が必須と思います。

足助病院の理念は「安全・安心・満足の医療・福祉（介護）・保健活動を通じ、中山間部地域住民の生活を守り、自然と共生できる文化的地域づくりに貢献する」であります。合併は「文化的地域づくりに貢献する」という理念を実践できるチャンスが来たと前向きに考えています。新しい豊田市への地域からの意見の発信は大変重要なことです。とくに生活に直結する福祉介護・医療に関する積極的な提案が当院の使命でありましょう。地域に住む人びとにとって魅力のある保健・医療・福祉体制づくりが当地区の特色となり、結果として、当地域への人口の流入が起こるようにしたいものです。

これからも地域の人々が参加する（出来る）病院を目指し、常に「新しい提言・提案」に向けて努力致します。引き続き倍增のご支援を心よりお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2006年 一人権、倫理、それに自律—

新年明けましておめでとうございます。

2005年は、1級建築士による耐震強度偽装問題で欠陥構造マンションが話題となりました。その中で、建築士だけでなく、オーダーをする販売業者や建設業者などによる経済的設計という名のまやかし、私的、公的を問わず検査・調査機関のずさんさなどが明らかになりつつあり、それぞれの業種における専門家の職業倫理が課題としてクローズアップされました。

不祥事があるたびにコンプライアンス（法律遵守）の重要性が叫ばれ、お上からマニュアル（手引き）作成しなさいというきつい指導が行われます。それが増えていけばコンプライアンスのマニュアルだらけになってしまいます。マニュアルはあるが多すぎて誰も見ない！マニュアルのためのマニュアルが必要などというブラックユーモアの世界に入っています。

性善説でなければ（すなわち人を信じないという立場）法律が必要になります。法律が複雑怪奇に絡まって、ふと気がつくと人のために良かれと思ってしてあげたことが法律に触れることもあります。現在の日本は、コンプライアンス、職業倫理が崩壊しているといわれますが、職業倫理の前に人間としての倫理が低下しているのではないのでしょうか？

倫理の基本は人権の尊重であると考えます。人権を守るという原点から、全ての倫理が派生していると思います。自由、平等、人権尊重という基本的人権の中でも、生命への畏敬と個人の尊厳が、医療人にとって最も重要な倫理の根元であります。病院で働く私たちは医療のプロであり、プロとして誇りを持つことが必要です。その誇りの裏打ちはたゆまぬ知識・技術の向上であります。しかし、知識・技術に基づく誇りだけでは不十分で、それに思いやり「恕」が加わらなければなりません。昨年の病院の目標を「知と技と恕と」にした理由です。

地域に開かれた病院であるために本年の目標は、「人権、倫理、それに自律」としました。人権を大事にする倫理観に基づき、プロ集団である誇りを持ち、しかし、驕らず謙虚に自らを律する集団でありたいという願いです。

自律「プロフェッショナル オートノミー」を今年のテーマに挙げて、これからも地域の人々が参加する（出来る）病院を目指し、常に「新しい提言・提案」に向けて努力致します。引き続き倍増のご支援を心よりお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2007年 ―試される時―

新年明けましておめでとうございます。

2006年は、医療・保健・福祉にかかわる専門集団として、人権を大事にする倫理観に基づき、プロ集団である誇りを持ち、しかし、驕らず謙虚に自らを律する集団でありたいという願いで、「人権、倫理、それに自律」を目標に掲げて仕事をしてきました。

しかしながら、最近の医療制度の改変は行き詰った日本経済を反映し、健全な医療保険制度の維持存続の掛け声の下、医療・介護費用削減が続けられています。病院や介護施設に対する診療介護報酬の低減が相次いで打ち出され、精神論だけでは地域の健全な医療・介護サービス提供が継続不可能となりつつあります。また介護費用を縮小させるために、療養型病床の廃止も予定されています。要介護者の在宅療養への誘導を諮る政策がありますが、在宅療養の基盤が不十分な状態でこれが推進されれば介護難民が発生します。さらに医療の効率化を名目に、専門化した医療の集約化が進められていますが、このような現在の政策が続けば、いわゆる地方の医療を支えてきた地域密着型の病院は消え行く運命でありましょう。一方、労働条件の過酷さから病院勤務医師が辞めていくという現象が起きており、集約化に拍車をかけることになっています。まさに地方における医療崩壊が始まっています。

このような状態は、皆医療保険制度が始まったときと酷似しているようです。現在の状況は、まさに50数年前にタイムスリップしたような感じです。すなわち保険料を支払っても、近くに医療サービスを受ける医療機関が十分でない、という状況です。先人たちは、そのような中、地域の人々がお互いに助け合い、協同組合の病院を設立したわけでありました。現在の私たちも、新たに「試される時」におかれていると思います。厳しい状況であるからこそ、医療を提供する側（病院）と受ける側（患者様）との協力で、この難局を乗り切ることが必要です。そのためには相互理解の基本となる十分な情報交換、すなわち患者様からの意見、病院からの情報公開が必須です。その情報を元に、智慧を出し合って、助け合う体制ができるものと思います。

これまで、地域へ出かけての健康講話、元気アップ体操キャラバン、モニター制度、病院年報など、情報公開活動が続けてきました。今年は地域の健康を目標に、医療・介護・保健に関するセミナーを病院で開催したいと企画しています。引き続き倍増のご支援を心よりお願い致します。



赤ひげからの 年始の想い



2008年 ー期待値ー

新年明けましておめでとうございます。

この数年、医療を取り巻く状況が大きく変化してきました。それで明らかになったことは絶対的な医師不足であります。医師不足では地域の人々へ十分な保健・医療・介護を提供できません。十分な医療とは、臓器移植や遺伝子医療に代表される高度医療をいうわけではありません。医療を受ける人々が満足できたと感じる医療であると思います。満足するということは期待した内容より結果が一致もしくは優ることによって得られる感情であります。期待値が高く、結果がそれより低ければ満足度は低く、逆に期待値が低くて結果がそれを上まれば満足度は高くなります。

たとえば、「田舎の小さな病院でもMRIがあるんですね！」「CT検査がいつでもしてもらえるんですね！」は期待値が低いことによって得られた良い満足度です。逆に「予約制なのに何故30分も遅れているんですか！」「親切な良い先生と聞いて来たのですが、そんな風に言われるとは！」などは、結果が期待値を下回ったことから満足が得られない例です。

満足度を上げるには期待値を下げればいいわけですが、それは良いことではありません。期待値とはいろいろな情報から形成されるものであり、評判や信頼という内容と同じであるからです。宣伝をしすぎて期待値を上げすぎることも感心しません。信頼を少しずつ得ながら期待値を増やし、それに見合う以上の結果を提供することが大事であると考えます。

今年も厳しい医療環境が続くと思われますが、「貧すれば鈍す」ではなく、「富は知恵を妨げる」といわれるように、苦しいときこそ知恵が湧き上がってくると信じて。職員それぞれが自分への期待値を高める年になることを願っています。

引き続き倍増のご支援を心よりお願い申し上げますとともに、今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。

堪忍 寛容 「己を責めて人を責めるべからず」

知恵、仁愛、勇気 が品格を作る。



赤ひげからの 年始の想い



2009年 —アイデンティティーと寛容—

昨年末の金融危機から急激な不況となりました。厳しい状況は医療環境だけでなく一般生活環境の悪化として広がってくるでしょう。生活に格差が生じて世の中が不安定になると、価値観を統一してアイデンティティー（同一性）を保つ安心感を得ようとするから不寛容になるといわれています。1929年の大恐慌後に台頭してきた軍部によるクーデター未遂、日本を中心とした大東亜共栄圏というアイデンティティーの提唱と他者への不寛容、それから続いた戦争という歴史は記憶に残っています。これからの社会は非寛容へ進んでいく可能性が高いのでしょうか？また同じ過ちを繰り返すのでしょうか？非寛容は格差社会を是認することに繋がる可能性もあります。

寛容は「意見表明を自由に認め、差別しないこと、人を責めないこと」であります。経済・生活が安定していると、自分に直接的な被害がない限り他者に寛容となることが出来ますが、不安定になると価値観の統一でアイデンティティー（同一性）を保ち安心感を得ようとするから不寛容になります。

他者への寛容は価値観の多様性を認めることであるので、寛容が進みすぎると多様性が高まって自分のアイデンティティー（価値観，存在証明）が揺らいでくるとい状態が起きてきます。寛容と非寛容の繰り返しは社会のどの場面でも起きてきました。

家庭でも職場でも、日本中で、世界中で。自分のアイデンティティーを考えると、自分であること、男であること（夫であること，父親であること，中年であること），医師であること，足助病院の一員であること，医療人であること，厚生連の一員であること，三河人であること，愛知県人であること，日本人であること，アジア人であること，人間（地球人）であること，動物であること，生命体であること，宇宙の物体であること・・・，自分がよって立つべきものをアイデンティティー（同一性，属性）とすれば，それは視点によってどんどん広がります。自分の正体，存在証明をどこに求めるかで，他者への寛容も広がることになります。この厳しい時代に自分はどこにアイデンティティーを求めるか？それが重要な問題です。

苦しい状態であるからこそ，アイデンティティーを狭くすることなく，信頼と寛容でもって協働するという精神で今年も精進したいと思います。

引き続き倍増のご支援を心よりお願い申し上げますとともに，今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2010年 一足助病院が目指すものー

新年明けましておめでとうございます。

世界経済の停滞が続き2年が過ぎようとしています。日本経済が成長していた、かつての懐かしい時代では、医療は拡大し、市場性のない農村地帯（へき地）でもより良い医療が提供でき、かつ病院経営ができるような診療報酬が手当てされていました。高度成長を経過し、気がつくとも一部の農村地帯は都市化？されていました。そして現在、経済が停滞、縮小してきたので医療も縮小し、まずは市場性のないへき地から医療が抜けてきています。医師不足、病院経営の赤字化が顕在化しています。

医療は、警察、消防の役割と同様、地域における安全を維持するための社会的基盤の一つです。警察、消防は安全、安心のために必要不可欠なものですから、暇だからといって、経営効率の観点から削減はされません。医療も同様に経済的な効率化が第一に求められるものではありません。地域が健康であれば医療機関が赤字になって経営不振になるという現在の診療報酬制度がおかしいのかもしれませんが、少子高齢化となった日本では、これまで運用されてきた社会保障制度全体の構造を見直す必要があります。政権交代が昨年実現しましたが、まだどの分野でもその成果ははっきりとしていません。しかし、政権交代したから良い制度が上意下達で降りてくるということは期待すべきではないと思います。少なくとも医療に携わるプロフェッショナルとしての矜持を保ち、現場から新しい制度の提案をすべきと考えます。

これから5年間で足助病院の目指すものは、

- ・ 豊田市東北部、中山間地の地域に住む人々が健康で文化的な生活ができる環境を守るために医療・保健・介護、福祉サービスを提供する。
 - ・ 地域の人々と共に歩む。
 - ・ 病院で働く職員が誇りを持てる組織にする。
- そのために
- ・ 医療・保健・介護、福祉の統合を進める。
 - ・ いわゆるへき地における医療機関（診療所）との情報共有化を推進する。
 - ・ 地域の人々が参加できる施設を提供する。
 - ・ 災害時でも安全な建物とする。
 - ・ 職員が安全に働けるように人員を確保する。

日本における少子高齢化の先進地区から先端医療ではなく、先進的な医療制度を提案しつづけたいと思います。引き続き倍增のご支援を心よりお願い申し上げますとともに、今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2011年 ―足助病院が目指すもの2―

新年明けましておめでとうございます。

昨年の新年の挨拶には、これからの5年間で足助病院の目指すものとして、

- ・三河中山間地で安心して暮らし続けるための医療・保健・介護、福祉サービスを提供する。
- ・地域の人々と協働する。
- ・病院で働く職員が誇りを持てる組織にする。

そのためには

- ・医療・保健・介護、福祉の統合を進める。
- ・いわゆるへき地における医療機関（診療所）との情報共有化を推進する。
- ・地域の人々が参加できる施設を提供する。
- ・災害時でも安全な建物とする。
- ・職員が安全に働けるように人員を確保する。を提案しました。

ハードの面では、耐震構造が十分な建物とするための新しい病院に向けての建設が今年3月末から始まります。ソフトの面は、「三河中山間地で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会」の充実が必要となります。住民の皆さんとの対話を通じて、当地における新しい助け合い制度の構築を目標とします。

過疎で高齢化が進む当地区での最も重要でかつ喫緊の課題は、日常生活における外出方法、すなわち移動方法であります。車の運転ができる間は問題ではありませんが、運転が不可能（または危険）になると過疎地域では診察、買い物などの日常の外出に困ります。いわゆる足を如何に確保するかが重要な問題となります。通院される患者さんの苦勞を考えると、自然に移動手段の課題に突き当たります。便利で効率的、かつ経済的な交通手段を作り上げることが安心して暮らし続けるための必須条件です。衣・食・住だけでなく、医療・介護、楽しい文化的活動をするために必要な移動手段。利用したい時に、利用したい場所へ比較的安い費用で行ける。このようなシステムを構築するには、お互いに譲り合う気持ちが必要になるでしょう。

困っていることを解決するために、これをして欲しいという内容を要求することだけでは、問題は解決できないと思います。やって下さい、やってくれない、という態度で現状の打開は出来ないでしょう。自分たちが必要と思うことは自分たちでまず作り上げる努力をすることが必要だと思います。困っていることの詳細は当人が一番わかっているのですから、他人にその重要性を認識して貰うことは隔靴搔痒の感になるのです。自分たちで行動を開始することが、急がば回れで、近道になると考えています。気持ちの上だけでも自立、自律です。

当地区は少子高齢化の先進地区です。後続する人たちのために先進的な医療制度を提案しつづけたいと思います。引き続き倍増のご支援を心よりお願い申し上げますとともに、今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2012年 一夢、自主独立一

《パソコンから目覚まし代わりにの演歌が聞こえる。目を覚ますとモニター画面上に本日の予定が浮かび上がる。今日は病院へ行く日だ。そういえば今日飲めば薬がなくなる。正月明けで美味しい酒とおせち料理を満喫したので、体重も減らない、糖尿病も改善はしてないだろう。採血するのは嫌だけど、主治医の嫌味を聞き、叱られに行ってくるか。

5年前までは自分で車を運転して病院通いであったが、難聴、視力低下が原因で自損事故を起こして以来、息子に運転免許証を取り上げられた。それは困ったと、古女房と嘆いていたら、病院がバクシーという乗り合いタクシーで自宅まで送り迎えしてくれるという話になった。診察の予約と一緒に迎えの車の予約ができて、診察当日は自宅の前まで迎えに来てくれるので膝の悪くなった年寄りには何よりだ。帰りも、内科、眼科、整形外科、脳外科の物忘れ外来の4つの科にかかり、昼になっても病院からバクシーに乗せてもらえる。途中で支所や農協に寄ったり、スーパーにも寄ってくれるので大助かりだ。

しかし、料金が安い分だけ乗り合いだから、一番の迎えになると途中寄り道するのでちょっと大変だが、知り合い同士なので話が弾んで、すぐ病院に着いちゃうわ。帰りの寄り道もお互い様だから仕方ないな。年寄りだから時間もあるしいいわな。そのうちとなりの部落で寄り合いがある時にもバクシーが利用できるようになるという話だが、院長の言うことだから話半分に思ってる。

しかし、こんなに便利だが料金が安いのはどうしてだろうか？部落の人たちが集まってよく話し合いをして、融通しあい、助け合うことをいつも心がけているからだろうな。困れば皆で知恵を出し合い、話し合い、折り合いをつけていくのが本当の絆だろう。元気な老人が元気でない老人を助ければ良い。その段取りを、ITかITCか知らんが、知恵のあるもんが上手く作って、わしらに簡単に使えるようにして貰えばいいんじゃない。丁度、5年前に三陸沖で起きた大地震と津波、それに続いた原発事故で大災害を被った東北では、放射能被害から地域の高齢化に拍車がかかり、地域の再興は残った老人たちの手で行われたもんだ。田舎の過疎、高齢化は恐れるに足らずじゃ。

しかし、地域の人たちの知恵が寄り集まっても、問題がある。それは法律という規制じゃ。地域の人々がこれはいいから早速やろうと思っても、これをするにはこういう規制があって出来ません、それも難しいです、とよく耳にする。そんな世の中で、よくバクシーを走らせることが出来たもんじゃ。その当時の院長は偉かった！》

「早くしないと遅れますよ」という声に、目が覚めた。今日は平成24年正月4日、病院の仕事始め、早く講話の準備をしなければ。バクシーの成功は夢だったか！！

私たちが生活する三河中山間地は、少子高齢化、過疎を特徴とし、小学校の閉鎖・合併、行政サービス、医療・保健・福祉サービスの不十分さ、移動手段の貧弱さなど、安心して暮らし続けるためには困った状況です。困れば知恵が出るのが人間です。知恵を出してそれを実現するには、住民の力とそれに見合う規制緩和が必要です。できるところから少しずつ、自治権の獲得が出来れば、なお素晴らしいことになるでしょう。

当地区は少子高齢化の先進地区です。後続する人たちのために先進的な医療制度を提案しつづけたと思います。引き続き倍増のご支援を心よりお願い申し上げますとともに、今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2013年 ―夢へ、一步一步―

《今日は正月2日目、3人の孫にせがまれてモールに来た。すごい人ごみで喧騒すさまじい。何とか目的のゲーム機をゲットできた小学高学年の孫は大喜び。次はおもちゃだ、ガチャガチャだと、引き回され、お昼になった。ラーメン、ハンバーグ、おにぎり、と雑多な要求をする孫に振り回され、やっと4人でテーブルにつけた。孫たちの残したものを食べ終わり、次はアイスクリームへと移動しようとしたとき、みぞおちの辺りがぐっと痛くなってきた。しばらく我慢できたが冷や汗が出てきた。めまいもする。その場にへたり込んだら、孫が「じいじ、どうしたの？ えらいの？」。心窩部痛、既に胃切除をしている小生に胃潰瘍はありえない。心筋梗塞か？「救急車を呼んで！」10分後にモールの一角で休む小生のところへ救急隊員が到着。「メディカカード持ってますか？」そうだ、財布にいつも携帯している。呼吸も苦しい中「財布の中」。救急隊員が財布に読み取り機をかざすと、小生の年齢、性、住所、病名、既往歴、現在の内服薬などが瞬時に現れ、「糖尿病をお持ちですね。胃の手術を10年前にしてみえますね」とてきぱきと小生に確認。こちらはうなずくだけで事足りた。モニターを装着され「心筋梗塞の疑いがあります。すぐ3次救急病院へ搬送します。」10分後には病院へ。病院ではメディカカードから、これまでの詳細な治療歴、検査データがクラウドサーバから読み取られ、的確な診断と治療が開始された。30分後には心カテが始まりステント挿入、無事治療は終了した。メディカカードを持っていた御蔭で、すばやく無駄のない医療で助かったのだ！》

総務省が公募していた「ICT街づくり推進事業」に対して、名古屋大学を代表とする共同提案により、豊田市が委託先候補として決定しました。「ICT街づくり推進事業」は、ICT（情報通信技術）を活用した新たな街づくりの在り方やその実現に向けた具体的な展開方策である「ICTスマートタウン」先行モデルの実現を、検証するための実証プロジェクトです。医療分野においては、足助地区を中心に、ICカードに医療情報を書き込むことによって、平時の医療情報の共有化と救急時に役立つ実験が始まります。

私たちが生活する三河中山間地は、少子高齢化、過疎を特徴とし、小学校の閉鎖・合併、行政サービス、医療・保健・福祉サービスの不十分さ、移動手段の貧弱さなど、安心して暮らし続けるためには困った状況です。医療情報が書き込まれたICカードは、急変時に救急隊員が読み取ることによって、一刻を争う状況を改善する助けになると思います。足助病院では治療できない疾病（急性心筋梗塞など）と診断され豊田厚生病院、トヨタ記念病院へ搬送された場合、大変役に立つものと期待しております。田舎に居ても、すばやく個人の医療情報が収集できることは不平等性の解消に繋がるでしょう。

当地区は少子高齢化の先進地区です。後続する人たちのために先進的な医療システムを提案しつつきたいと思います。引き続き倍増のご支援を心よりお願い申し上げますとともに、今年も皆様が健康で過ごされることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2014年 一夢へ、一步二歩一

皆様、明けましておめでとうございます。今年も皆様とともに健康で過ごせることを祈念しています。

昨年の巻頭言では「あすけあいカード：メディカカード」の内容をドラマ風に仕立てて書いたところ、小生の不手際により「あっ、これは夢だった」という一文が抜けていたための、小生が本当に心筋梗塞になったと信じられて、たくさんの方から見舞いの言葉をかけていただきました。

「ICT街づくり推進事業」の一環として、足助病院を中心とした患者様を対象に、昨年2-3月にかけて「あすけあいカード」885枚が配布され利用されています。平成26年は「あすけあいカード」の利用者を2000から3000名増やすこととなりました。従来、「あすけあいカード」を持っていると、救急車にお世話になる（ならないほうが良いのですが）時や、他の診療所の先生に受診されるときに便利なカードでした。今年は、それに追加する機能として、救急車で豊田厚生病院へ搬送されたとき、救急外来に設置予定のパソコンから、足助病院にある患者様の電子カルテ情報をそのまま見ること（閲覧する）ことができるようになる予定です。

このシステムが構築されると、「あすけあいカード」を持っている患者さんが心筋梗塞で倒れた場合、救急隊が駆け付けて、まずカードから基本情報を手に入れ、患者さんはそのまま豊田厚生病院の救急外来へ運ばれます。そこで救急外来に設置されたパソコンから、「あすけあいカード」をキーとして豊田厚生病院の医師が、足助病院の電子カルテを見ながら診療に当たることができます。「あすけあいカード」にあるほんの少しのデータではなく、最近の服薬状況、血液データ、レントゲン写真などを確認しながら的確な治療を施行できるようになります。このシステムが稼働すれば、救急隊員のみならず救急外来担当医師の負担軽減になり、患者様の救命に大いに役立つでしょう。もちろん足助病院の電子カルテ内の患者さんのデータは個人情報ですから、皆様個人の同意のもと、かつセキュリティの高いシステムが構築されます。

医療の連携（診療所と病院、病院と病院）には医療情報の共有が必要です。これまでのような紹介状を介してだけでは、救急時に役立ちません。「あすけあいカード」を持っていれば、少なくとも豊田市内で倒れた場合は安心です。全国で初めてのシステムです。

田舎は医療体制が不十分であると考えられています。しかしこのシステムがあれば、田舎に住んでいても、いざというときのための安心が得られるでしょう。結果として、多くの人々が移り住んでくださる可能性が出てきます。

本年も市行政の指導の下、「あすけあいカード」を利用した医療情報共有システムの実証実験を推進しましょう。皆様方のご協力をお願い申し上げます。



赤ひげからの 年始の想い



2015年 一夢へ、一步二歩一

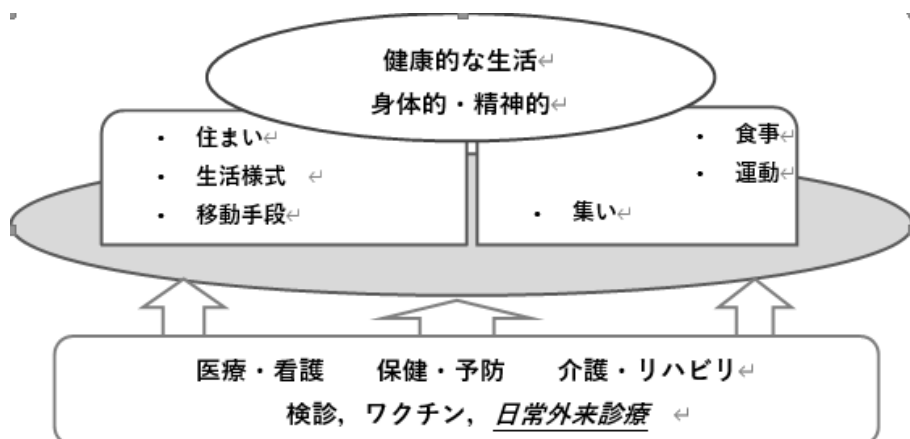
明けましておめでとうございます。今年も会員の皆様とともに健康で過ごせることを祈念しています。

2025年問題。高齢社会になり、日本の65歳以上の人は3000万人を超え、後期高齢者と称される75歳以上がその半数1500万人以上になりました。75歳の人の平均余命はおよそ15年と言われています。すなわち、これから後期高齢者は90歳まで生きることになります。望むべき人の一生は、大きな障害なく寿命をまっとうすることです。すなわち、「平均余命」と「自立して生活できる状態（健康と自覚する）＝健康寿命」との差を限りなくゼロにすることです。

その目標を達成するために、毎日の暮らし方を整えることが必要です。精神的にも身体的にも健康な生活を支えるには、先ず清潔な環境を提供する「住居」が必須です。そのうえで健康的な「生活様式」が成り立ちます。生活のあり方のなかで「食べること」と「動くこと」が身体的健康の基本となります。また精神的な健康維持には人とのコミュニケーション、すなわち「集う」が重要と考えます。ソーシャルキャピタルの大事な一つでしょう。

地域住民が多く集まる病院こそ、地域コミュニティの中心であるべきであり、「開かれた病院」が目指す方向です。「自然と共生」「贈与の精神」の二つを基本に、元気な高齢者が虚弱な高齢者を援助する、老人社会だが安心して暮らせる地域を目指します。今後も「地域住民が参加する」臨床研究をはじめとして、安心を提供する、住民による見守りシステムなど、地域の健康長寿に役立つ活動を継続していく予定です。

医療機関が中心となって地域包括ケアネットワーク（システムという言葉よりネットワークの方が人を中心に老いているイメージです）を各地域で作りあげる時期がすぐそこまで来ています。会員皆様方のご協力をお願い申し上げます。





赤ひげからの 年始の想い



2016年 ー自立、自律ー

明けましておめでとうございます。今年も会員の皆様とともに健康で過ごせ、地域医療に貢献できることを祈念しています。

すでに高齢社会になっている足助地区にある当院（職員も高齢化していますので、老々介護ならぬ老々医療の現場となっている？）では、元気に通ってみえる高齢の患者さんがたくさんみえます。老夫婦世帯の方、独居の方、昼間独居の人、同居していても一人の人、よくしゃべられる人、寡黙な人、いつもニコニコしている人、なかには愚痴を言われる人、色々な方がおられますが、みなさん自立しているようにみえます。

しかし、その内情はそれぞれの人によって異なっているようです。老夫婦世帯でも、すべての方がオシドリ夫婦とはいかないようです。夫の面倒を看るのはしんどい、耳が遠くなって話が通じないなど、外来で愚痴をこぼされる方もみえます。同居しているが、1週間、家族と話をしていなくて、いつも食事を一人で食べている（孤食）人など。一方、独居ですが、毎日畑仕事をして、毎週、友達と遊びに出かける人、毎日欠かさず散歩をする人、などなど。

これまで当院が栄養調査した結果から、食べることについてみると、良好な食事ができているのは、先ず、老夫婦世帯と同居でも食事は老夫婦別の方、次が独居の女性、悪いほうは、同居でも孤食の人と独居の男性でした。また認知症に関するアンケート結果から、精神的に落ち込まない（うつ傾向でない）方々は、しっかり食事ができ、畑仕事などやるべきことがあり、良く外出する、それに良く社会的参加をする人たちでした。

このようにみると、身体的にも精神的にも健康で元気に過ごしている（健康寿命が長くなるであろう）人は、自立しているようです。健康的に自立するためには、よく食べること、運動・仕事で体を動かすこと、お出かけして社会的参加すること、の3つが重要です。それには毎日の生活を自分で律する（自律）ことが必要です。

人からしてもらいたいことを期待する。これは自立していません。人からして欲しいことは、自分の思い通りにはなりません。夫が手伝ってくれない、嫁が気にかけてくれない、友人が来てくれないなど、「くれない症候群」になります。他人に期待することは自分の思い通りにはならないのです。しかし自分が人にしてあげたいことは、自分の思い通りにできます。誰かにしてもらおうより、誰かにしてあげる方が自立に良いのです。精神的な自立（精神の健康）なくして身体的健康は成り立ちません。

「人からして欲しいことは自分の思い通りにできないが、自分が人にしてあげたいことは、自分の思い通りにできる！」自律による自立を目指して、今年も健康で過ごし、皆様とともに、楽しく1年を過ごすことができることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2017年 — 寛容，人権，教育 —

皆様、明けましておめでとうございます。

世界中で、今も人権を否定する出来事—非寛容，が起こっています。その最たるものは戦争です。基本的人権を踏みにじる最悪の行為です。民族間の争い，宗教間の争い，国家間の争い，ともに相手を認めない非寛容さから起きています。最終的には人を殺しても良いという戦争になります。人は，生来，自分の優越性を誇示することが好きなのです。その個々が集団を形成し，部族間，宗教間を差別化することで，その優越性を争うのでしょう。

人権を尊重することは寛容につながります。逆に人権尊重せずに，人を区別して，さらに差別することで寛容さが消失します。区分して，それに余分な付加価値をつけると差別になります。昨年は非寛容の嵐が吹きました。アメリカの大統領選挙の顛末，移民拒否，ヘイトスピーチ，など枚挙にいとまがありません。差別，イコール非寛容です。

一方，人間における男女の違いは明白で，その関係は差別の歴史であるとも捉えられますが，男女間での戦争は一度も起きていないように思います。種族繁栄のためには欠かせないパートナーだからでしょうか？それとも男女間には寛容の精神である愛情があるからなのでしょうか？否，男女間は愛憎劇のるつぽです。古代神話から現代小説に至るまで，男女間の寛容・非寛容は永遠のテーマであります。しかし個々で相手を抹消する（殺人事件）ことはあっても集団ではありません。男女間の愛と寛容は同じでレベルではないのでしょうか。

2者択一，曖昧さをなくす単純化，正悪（決定）の即断，時は金なりで思考が寸断され，課題の洗い出しから決定までが短絡化してきています。物事を多面的に，かつ深く考えることが放棄されています。多様な考え方を学び，それを認めるには時間がかかります。それが教育の本質で，最も重要であるにもかかわらず，軽視されているように感じます。

いじめ問題の本質は，「人権尊重」教育の欠落によるものでしょう。福島から避難してきた子供に対する，「汚い」「感染する」「菌」などと言うようないじめは，子供だけの問題でなく大人の問題です。物事を科学的に考えるという教育がなされていないからです。教育が人を作る基本です。家庭，学校，社会全体でのお互いを教育し学び合うという姿勢が重要と考えます。お互いを尊敬し合わなければ寛容の精神は育ちません。

まずは伴侶，家族を尊敬し，職場の同僚を尊敬し，患者さんとその家族を尊敬することで，今年も健康で過ごし，皆様とともに，楽しく1年を過ごすことができることを祈念します。



赤ひげからの 年始の想い



2019年 — 挑戦 —

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は台風による水害、北海道胆振地方の地震と停電など、「災」が年を代表する漢字になりました。一地方の地震による火力発電所の停止が、全北海道の停電を引き起こすことが驚きであり、その配電網のあり方が課題となりました。電気をはじめとするエネルギー問題、道路・橋・トンネルなどの交通網の老朽化、水道事業の民営化を可能とする法案の成立など、いわゆるインフラをどう支えるかが問題となっています。

一方、このような災害時に立ち上がるボランティア活動も暗い話題の中では、一つの光明でありました。スーパーボランティアという言葉が流行語の一画にありました。大賞に輝いた「そだねー」はカーリングの日本代表の言葉として一世を風靡。「そだねー」は共感を示す相槌であり、同意を意味する言葉でしょう。お互いの意見を尊重して、まず共感、それから自分の意見を言う。その中で対話が生まれ、争いが少なくなるのでしょうか。「そだねー」はコミュニケーションの基本です。お互いが助け合う互酬の基本と考えます。

これまで、お金で買う「企業によるサービス」と、税金を使った「行政サービス」の充実で、地域住民の互酬による支え合いが衰退してきました。その一方で、グローバル化する市場経済の中で格差が増大すると同時に、人口減少社会による税収減で行政サービスの縮小が始まろうとしています。地域の暮らしの維持には、新たな仕組みが必要とされているように感じます。住民同士のたすけあいの基本は、まず話し合いでしょう。「そだねー」をお互いに発しながら、新しい仕組み作りに参加するという「挑戦」をしましょう。

日本全体が高齢社会に向かっています。当地域はその先進地区であり、当地域の取り組みが日本のこれからの見本になるであろうという矜持をもって楽しんで地域づくりをしたいと思っています。

今年も健康で過ごし、皆様とともに、楽しく1年を過ごすことができることを祈念します。



赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記61（2010年7月号）「フィリピンからの研修生」

6月21日に、フィリピンからの若い女性2名が巴の里へ研修に来ています。何故フィリピンから研修生が？

少子高齢社会の日本では、これから介護力不足が問題となります。そこで巴の里では、「愛知県厚生連」と社会福祉法人「あぐりす実の会」との協同で、「海外からの介護士受け入れプロジェクト」を立ち上げ、EPAに関する調査・参画や、フィリピン、ミンダナオ島のダバオにある日本語教育をしながら福祉の勉強ができるミンダナオ国際大学（福祉学科）との連携を行ってきました。昨年、小生はミンダナオ国際大学を訪問、フィリピンの老人ホーム視察、学生への講義などを通じ学生との交流をしてきました。その中で老人介護の実態が日本と大きく異なることを実感しました。学生が実習に行く老人ホームの施設はアメニティーが低く、車椅子や寝たきりの人が入浴できる風呂はありません。そこでミンダナオ国際大学の学生が来日して日本の介護の現状を見学することが必要と考え、学生の中から2名を巴の里へ研修に招待することを約束してきました。簡単にできると思って約束してきたのですが、入国のための手続きが大変でありました。紆余曲折、半年かかり、やっとのことで法務省の許可が得られ今回の実現となりました。彼女たちは、ジェイド・スノウ、ハパイ・レスリーの若い二人です。7月末まで、およそ1ヶ月の研修をします。彼女たちにとって海外旅行は始めて、当然日本も初めてです。見るもの全てが勉強です。緊張もしているようです。パレットでお会いになるかもれません。気軽にお声をかけてください。また巴の里へもどうぞ。



赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記62（2010年9月号）「三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会その2．『いきいき生活支援』アンケート．」

長～い名称の研究会発足について今年3月の院長日記で紹介しました．何故，今研究会を立ち上げるのか？しかもこんなに長い名前の研究会を？

足助病院はこれまでも地域の人々と共に，人々のために，医療・保健・介護サービスを提供してきました．「地域の問題は地域から声をあげて」が原則であります．三河中山間地域に在る診療所の先生方との「意見交換会」の中で，地域における医療・保健・福祉の存続が地域住民の安心した生活には不可欠であるとの考え方が再確認され、もっと広い視野から地域の方向性を考えていく必要があるという考え方で一致しました。このことから「三河中山間地域で安心して暮らしつづけるための健康ネットワーク研究会」の設立、発足の運びとなりました。当然，この研究会には医師のみでなくこの地域の診療所スタッフ・保健福祉関連施設職員・自治体関係者・農協関係者・地域住民の方々の幅広い参加が必要と考えています。9月25日に発足総会を開催します。

一方，この研究会の準備委員会では，経済産業省の平成22年度医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業（医療・介護周辺サービス産業創出調査事業）に企画を提案し，喜ぶべきことに無事採択されました．中山間地域における高齢者向け『いきいき生活支援』の事業化～複合輸送を核とした医療・介護周辺サービス～と題する調査研究を足助病院を中心として進めることになりました．その内容は，1）生活全般に関するアンケート調査（三河中山間地域：旧東加茂郡，小原，設楽町），2）高齢世帯，独居老人へのインタビュー，3）

バスとタクシーの良い面を兼ね備えた輸送システム（略称：バクシー）の模擬運行，などです．この院長日記をお読みの皆様のお手元に既にアンケート用紙が届いているものと思います．これから中山間地域で安心して暮らし続けるための重要な一里塚になるアンケートです．是非ご記入の上返信用封筒でポストへお願いします．

「中山間地域の健全な維持なくして，下流（都市部）に住む人びとの安全はない」をスローガンに，「地域住民の安心した生活の確保は自分たちの手で」を目標に掲げた研究会を立ち上げます．皆様の参加をお願いします．





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記63（2010年11月号）「足助高校生 久々のタイトルです。」

今から7年前の2003年，足助高校生に関する話題を書きました。「目に余るもの？」と「高校生が消えた？」です。

目に余るものとは？ 何が目に余るのか？ それは「若い男女が病院の中の待合いで仲良くしている姿」。いわゆる「イチャつく」姿は，けしからんということです。この「目に余る」ことが再び病院職員の間で問題になりました。高校生が抱き合っている，キス（接吻）をしている，などの目撃情報が報告されたのです。昔風に言えば，いわゆる不純異性交際でしょうか。健全な高校生育成のために高校に申し入れをすることになりました。その内容は抽象的ではいけないので，具体的に「病院内での，抱きつき，キス，男女のイチャツキ，女性とのあぐらかき」と書いて担当の先生へお渡ししました。

その数日後の午後4時ぐらいに，4名の高校生（生徒会の役員）と2名の先生が来院されて，小生から足助高校生に対する注意事項などを聞きたいという申し出がありました。そこで院長室にて，双方起立のままで15分ばかり話をしました。その内容は，1）足助高校生が病院の待合などを利用することは歓迎すること，2）しかし，先日の申し入れを守ってほしいこと，の2点でした。守って欲しいことは，目に余ることだけでなく，病院はお年寄りが多く集まれる場所であり，コミュニティーの場であるから（社会の中であるから），規則は是非遵守して欲しいということでした。もっと言えば，規則だから遵守ではなく，それは社会的道徳からすれば当然のように，自律して行動できるようになって欲しいという願いも一緒に話しました。

もう一つは，相手の気持ちを踏みにじらないで欲しいということ

す。職員が使用する建物が病院の裏手にあります。その通路を通ると足助高校の裏門に近いので、多くの生徒が通路として使用しています。しかし、その通路は家庭で言えば台所、納戸のような場所です。そこを他人が我がもの顔で通るのは如何なものでしょうか。小生はその通路に「通行しないで欲しい。足助高校生諸君！通路ではありません」など、お願いの張り紙をしてきました。しかし、全く効果がありません。通路を通る生徒を発見して注意すると、素直？に聞いてくれますが、時には売店を利用したので何故近道を使っていけないか？と逆襲を受けることもありました。このような経緯を生徒会の役員に話しました。同時に、このことは小生にとって、怒れることではなくて、「悲しいことである」と話しました。何故か？ 張り紙を書いた人の気持ちを全く踏みにじる行為であり、小生の人格を無視する行為であるからです。生徒たちは神妙に小生の話を聞いてくれました。

後日、担当の先生から、生徒会が主催する会を開くので小生に出席可能かと問い合わせがありました。可愛い足助高校の生徒からの誘いを断るわけがありません。万難を排して出席しますと返事をしました。

何が楽しいのか、人のために役立つ、人から感謝されること、人権、などについて話そうと考えています。楽しみでもあり怖くもあり、後日報告します。





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記64（2011年3月号）「健診を受けるのは、世のため人のため」

4月から新しい年度が始まります。足助の山も新緑を前に色和らぎ、桜咲く入学式、緊張した新人職員の初々しい顔、年度初めの恒例の景色です。もう一つ大事な行事があります。新年度の健診も始まります。健診には大きく分けて特定健診と「がん検診」があります。特定健診は生活習慣から惹起される肥満、糖尿病、高血圧症、高脂血症などの慢性疾患の予防と治療を目的としています。生活習慣の最たるものが「がん」であり、その早期発見を目的とするのが「がん検診」です。

全国における死亡原因の第1位は悪性新生物、すなわち「がん」であります。豊田市でも同様に、「がん」の部位をみると、男性では胃、肺、大腸、肝臓の順に多く、女性は、乳房、大腸、胃、肺、子宮の順となっています。当院の死亡診断書の解析を過去6年間していますが、高齢の人が多いためか、死亡原因の第一位は肺炎の呼吸器疾患です。しかし「がん」は常に第二位を占めています。その部位はやはり胃、大腸、肺、が多いのが現状です。癌による死亡を減らすには、「がん」にならないような生活を心がけることは当然ですが、それだけでなく「がん」を早期発見して根治治療ができるようにすることです。

早期発見のためには癌検診を受けることです。胃がん検診は美味しいバリウム、大腸がん検診は検便を、肺がん検診は胸部レントゲン写真と痰検査、乳がん健診はマンモグラフィーと超音波検査。このような内容を過去数年間地域の健康講話で話させていただきました。しかし、その効果は現れていません。なぜなら当院の死亡診断書を解析すると、癌の診断が減少していないからです。豊田市の癌検診受信率は胃がん、大腸がん、肺がん共に2割前後と低率です。講演会における癌検診の勧めだ

けでは不十分なのでしょう。

何故健診を受けないか？ その理由として、「時間がない，面倒だ」「自分は大丈夫だ」「健診で何か見つかりと心配」などを良く耳にします。「早く発見するための健診」，「自分が大丈夫であることを確認するための検診」です。発見が早ければ治療も簡単で医療費の節約になります。少子高齢化社会の中で医療費の節約が叫ばれています。医療費は皆さんの保険料と税金で賄われています。自分だけが良いという考えではいけません。財政的にみれば「健診を受けるは世のため人のため」です。

年をとるほど癌の発生は高くなります。しかし「がん」は早めに見つけて治療すれば治癒する可能性があります。もう年だからと言われず，誕生月には「がん」検診を！「精密検査が必要です」という案内を手にしたら，すかさず相談をしてください。「がん検診」受診率50%を目指しましょう！ 死亡診断書の原因に「癌」と書かないために！





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記65（2011年7月号）『いきいき生活支援』事業

平成23年度も経済産業省の医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業に足助病院の提案が採択されました。

昨年度の同事業では、1) 中山間地域における生活全般に関するアンケート調査（三河中山間地域：旧東加茂郡，小原，設楽町），2) 高齢世帯，独居老人へのインタビュー，3) バスとタクシーの良い面を兼ね備えた複合輸送システム（人と食事の輸送，略称：バクシー）の模擬運行，を実施してきました。

今年は，新しい複合輸送システムを使った通院サービスと食事の配食サービスの有用性の調査を中心に行う予定です．今回は，まず足助地区，旭地区の病院利用者を対象に参加会員（仮称：あすけあい会員）を募集します．輸送システムはオンデマンド方式で，自宅から病院までの輸送をします．昨年と同様に乗り合いです，時間は予約された人数，予約された自宅の場所から，コンピューターがバクシーの走る路線を，自動的に決定するシステムです．待ち時間が少なくなるように，効率的な乗り合い人数，巡回ルートを設定してくれるようです．会員登録されれば自宅が停留所になるわけです．小生の頭では理解できないシステムがあるということを知りました．しかし試行しないと本当のところは解りません．試行は10月から12月までの3ヶ月間を予定しています．また配食についても同様に試行します．

会員になっていただくことで，バクシーや配食に関する運用方法，利便性の評価などについて積極的な意見参加をしていただくこととなります．今回の複合輸送サービス実験で，運用費用が計算できます．事業として成り立つための方策を練る基礎データが収集できると思います．ど

れほどの料金設定が必要か？会員同士の助け合いで経費節減が可能であろうか？など，会員の積極的な意見が，今後の複合輸送システム継続の成否を決定するものと考えています．自宅を停留所として設定できる複合輸送サービスは，これからの中山間地域のまちづくりの核になると期待しています．皆様の参加をお願いします．

「中山間地域の健全な維持なくして，下流（都市部）に住む人びとの安全はない」をスローガンに，「地域住民の安心した生活の確保は自分たちの手で」を目標に活動をしてゆきます．





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記66（2011年11月号）

『いきいき生活支援』事業パート2、いよいよ開始

平成23年度も経済産業省の医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業に足助病院の提案が採択されました。

今年は、主に新しい複合輸送システムを使った通院サービスと食事の配食サービスの有用性の調査を予定し、まず足助地区、旭地区の病院利用者を対象に参加会員（仮称：あすけあい会員）を募集しました。お蔭様で、9月末の会員数は300名を越え、10月3日からサービスを開始することが出来ました。輸送システムはデマンド方式で、自宅から病院までの輸送をします。昨年と同様に乗り合いですが、今年は5ナンバーの7人乗りで、時間は予約された人数、予約された自宅の場所から、コンピューターがバクシーの走る路線を自動的に決定するシステムです。待ち時間が少なくなるように、効率的な乗り合い人数、巡回ルートを設定してくれます。会員登録されれば自宅が停留所になるわけです。小生の頭では理解できないシステムがあるということを知りえました。しかし試行しないと本当のところは解りません。試行は10月から12月までの3ヶ月間を予定していますが、12月は有料となります。原稿を書いている今日、輸送、配食ともに運行できています。乗り合いバクシーの予約・確認方法の取り決めや、配食サービスでの受け取られる利用者さんが不在の場合の取り決めなど、施行しながら決定することが多くあります。その取り決めは利用者の方々の意見を十分に取り入れていく予定です。そのために会員制としました。会員になることによって、自分たちが利用するのは他人任せ（今回の場合は病院任せ）にしないで、自分たちで参加し、工夫しようという気持ちを持っていただくことができると考えてい

ます。多くの方々の口コミで、今日現在（10月27日）会員数は420名となりました。600名を目標としています。

どれほどの料金設定が適正か？会員同士の助け合いで経費節減が可能であろうか？など、会員の積極的な意見が、今後の複合輸送システム継続の成否を決定するものと考えています。自宅を停留所として設定できる複合輸送サービスは、これからの中山間地域のまちづくりの核になると期待しています。皆様の参加をお願いします。





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記67（2012年5月号）新外来棟にて診療開始

平成24年3月 26日、いよいよ外来新棟での診察が開始されました。
有名の小説「雪国」のはじめの文章をもじって「長いトンネルをくぐり抜けるとそこはホテルのような外来棟であった。」
仮玄関の移動によって、トンネルのような長い旧棟を通して新しい外来棟に到着します。仮玄関から外来新棟までの間、職員が誘導していますが、外来診察室・レントゲン検査室・内視鏡検査室・エコー検査室の所在変化などで、皆様には大変なご迷惑をかけております。外来診察後のレントゲン検査、心電図検査のための移動距離もこれまでより長くなりました。また売店、自販機コーナーの縮小、トイレの数も少なくご不便をおかけします。

しかし、新しくなったのでホスピタリティーは改善したと思います。廊下は絨毯風のものになり、転倒しても骨折の頻度は低くなるでしょう（当然、転ばないのが大事です）。（ただし掃除が大変であります）。内装は全体に落ち着いた雰囲気の色を基調とし、1階の廊下にはワンポイントとして紅葉の色、2階はカタクリの色を配色して、足助らしさを表現しています。来年には3、4階と出来上がり、新緑と水の流れの色がワンポイントに加わります。外観の黒と白は、当然、足助をイメージしたものです。西日が当たると違った黒が発見できます。

「新しい病院になって戸惑ってしまうが、きれいになってありがとうございます。」と良く言っただけです。「お蔭様で。」という返事をさせていただいています。皆様のお力添えで足助病院は改築が進んでおります。診療体制を維持しつつの改築のため、皆様には、駐車場の不便さをはじめ、騒音、移動距離の長さなど大変ご迷惑をおかけしております。

す．来年2月には病棟も新しくなり、玄関も正規の場所に戻り、移動距離は短く、トイレも多くなります．診療を休止せずに改築するための、9ヶ月間の不便ですので、もうしばらくお待ち下さいますようお願い申し上げます．

「病院は新しくなった（ハードは改善した）が、中身（ソフト：医療の質、職員の対応）が低下した」と、言われないように職員一同頑張りますので宜しくご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます．





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記68（2012年7月号）地域医療とは

「地域医療の一助になるべく新たに診療所を開設しました」という挨拶文、地域医療の崩壊、などと「地域医療」という言葉が使われています。「地域医療」という言葉ほど漠然として使用されているものはありません。行政で使用されても、言葉としての明確な定義がありません。大学病院でも地域医療という言葉を使います。都会の病院でも、農村の病院でも、小さな診療所でも、みな「地域医療」というので、いろいろな幅で解釈されています。各医療機関にとっての対象地域が地域であるとなれば、すべてが「地域医療」となります。「地域医療」とは、やはり人の顔と顔が見える関係があること、すなわち患者さんは職員の血縁・地縁の人であり、「病院内を歩いている人で知らない人はいない」という状態を言うのであろうと考えています。足助病院の患者さんは将にこれです。病院内いや病院周囲を歩いている人はすべて知り合いです、という状態でしょう。働く人もかかる人もすべて仲間という感じでしょうか。この関係は良い面と悪い面を持っています。仲間感覚で何でも言いやすい、親身になれる、などの利点があります。しかし、なれ親しくなりすぎて（馴れ合いに）、お互い（病院職員と患者さん）の間に建設的な批判ができなくなることです。建設的な批判とは共に成長するために必要なもので、お互いに言いにくいことでも、はっきりとしかし優しく思いやり（恕です）をもって言うことです（言いにくければ意見箱に投書してください）。もう一つは個人情報に関することです。患者さん同志、患者さんで見舞いの人との関係がいろいろあり、患者さん本人の病状を誰にどこまで話していいかが問題となります。病室にて、見舞い人から「この人の病気は何だね？」と聞かれることが良くありま

す。これに安易に返事すると問題になりますので、まず「あなたは患者さんの何に当たりますか？」と聞いてから話をするようにしています。廊下でも「誰々さんはいつ退院できるのか？」などと聞かれますが、聞かれた小生は、「どういうご関係ですか？」と確認してから答えるようにしています。

いずれにしても、このような仲間感覚は大変大事で、地域医療を担う足助病院の根幹を形成している重要な財産であると考えています。その財産の上に、建設的批判と個人情報もしっかりとした扱いができることが加われば、これが本当の「地域医療」の形だ、と世間に自慢できるのではないのでしょうか。これからも皆さんと一緒に考えて生きたいと思えます。





赤ひげ先生の 院長日誌



院長日記69（2012年10月号）「地域力」

少子高齢化！

これまで当地区のような中山間地・田舎を代表する言葉のようでしたが、最近では日本全体を表すようになって来ました。足助病院が担当する地区の高齢化率は約37%。豊田市の市街地と比べると15～20年先を進んでいます。全国には当地区に似た、いやそれよりも高齢化の進んだ、いわゆる限界集落もあるでしょう。田舎では少子高齢化に加え、過疎が問題です。広い地域に少人数が住んでいる…人口密度が低いのです。そのため市場経済化された現在社会では、市場がない田舎には色々なサービスが流入して来ません。逆に消失していくのが現状です。人口の減少→消費の低下→商売が成り立たない→お店がなくなる→不便さが増す→生活不便→人口減少、という悪性サイクルが回っていきます。

これらの問題を解決するためには問題の元から考えないといけません。価値観の変容が必要です。なんでもお金に換算して考えるのではなく、お金以外にも価値のあるものが多くあることを発見することです。それに加え、当地区のような中山間地域に対する絶対的価値観（地域愛）の醸成も重要です。

先日、文化人類学者であり思想家である中沢新一先生と河合組合長と小生との鼎談（平成24年10月20日午後、飯森座にて）において、中沢先生は「日本文化の成り立ちは里山・中山間地から起こってきた」と言われました。その中山間地が貨幣経済と市場原理で荒廃していった良いはずがありません。地域の再生には価値観の変容とそのコミュニティーの中心となる核が必要でありましょう。学校、病院などがその中心になります。中心になりながら情報を発信し続けて、価値観の変容へと繋が

るようになることが大事です。これまでのような、がんじがらめの法律に縛られずに、地域の人々の考えで物事が決定できる一本来の自治一地域となれば、多くの人々が集うことになるでしょう。そこでは、人々が折り合いを付け合って、お互い贈与の精神が通じ合い、決して損得だけで物事を決めないシステムが出来ていることでしょう。

また中沢氏は「中山間地の過疎化と日本の産業の空洞化減少は、一見違うようにみられるが、全く同じ形のものと考えられる」と指摘されました。それならば、当地区の再生は、日本の再生に繋がるのだ、という矜持を持って、地域の人々と頑張ろうと思いました。これからも皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。



「何故フィリピン・ダバオへ行ったか」

2010. 2 院長会76巻

少子高齢化の進み具合を推測し、そして少しの想像力を働かせれば、今後の介護労働力確保に対する取り組みは絶対不可欠な問題であるという認識ができます。日本の人口減少社会における介護労働力不足については、海外に視野を広げた東アジアとの協同という視点からの検討が必要であり、愛知県厚生連は遅ればせながら、具体的にはフィリピンとの相互補完関係による取り組みとして展開してきました。

平成20年12月、愛知県厚生連・(福)東加茂福祉会・(福)あぐりす実の会(以下3者)の協力連携によるプロジェクトチームを設置して、平成20年10月にはフィリピン人介護学生の研修受け入れ、平成21年度以降は日本フィリピン経済連携協定(JPEPA)への参画検討など、実践的取り組みに向けて活動を進めてきました。インドネシア、フィリピンとの間にEPAが開始されましたが、その先行きは不透明であるために、現時点ではフィリピンとの相互補完を軸にした連携が重要であるとの判断に至りました。その相手は、日本フィリピンボランティア協会(JPVA)を介して知りえた、日本語教育を併用したミンダナオ国際大学(MINDANAO KOKUSAI DAIGAKU: MKD)(MINDANAO INTERNATIONAL COLLEGE)です。

フィリピン、ミンダナオ島のダバオに日系人会とJPVAが協力して設立されたユニークな名前をもつ大学であり、国際学科と社会福祉学科が中心である小さな大学です。昨年冬、「巴の里」と「大地の丘」へ、MKDの学生2名と教員2名が訪問してくれました。そのときの学生の明るくて人懐っこい性格に新鮮な気持ちを抱き

ました。そのMKDとはどのような大学か？現状を知らねば相互補完は不可能との気持ちから、3泊4日のダバオ訪問となりました。

MKDの教育施設、システム、スタッフ学生の現状として、学生の経済的問題、卒後就職の課題が明確となりました。すなわち、フィリピンでは介護現場に就職がないこと、フィリピン学生は日本での就業を強く望んでいること、しかし、日比の老人ホームの違い（MKDの学生が日本で働く場合、日比の老人ホームの違いの認識）は歴然としており、フィリピン学生が日本で就業するには、日本での研修が授業の一部として組み込まれることが良いこと、などが解りました。よって来年、数名の学生を巴の里へ研修（招待）することにしました。介護の現場での支援だけでなく、滞在中の生活や日本語教育支援など問題がより発生するでしょう。何かを始めることが異文化の相互理解の始まりと思い楽しみにしています。

「フィリピンからの研修生」

2010. 9 病院長会会員便り80号

6月21日に、フィリピンからの若い研修生（女性2名）が（福）東加茂福祉会の特別養護老人ホーム「巴の里」へ研修に来ました。

前回76号で紹介しましたように、少子高齢社会の日本では、これから介護力不足が問題となります。そこで、愛知県厚生連は（福）東加茂福祉会・（福）あぐりす実の会との協同で、「海外からの介護士受け入れプロジェクト」を立ち上げ、EPAに関する調査・参画や、フィリピン、ミンダナオ島のダバオにある日本語教育をしながら福祉の勉強ができるミンダナオ国際大学（MINDANAO KOKUSAI DAIGAKU; MKD:福祉学科）との連携を行ってきました。

昨年、小生はミンダナオ国際大学を訪問、フィリピンの老人ホーム視察、学生への講義などを通じ学生との交流をしてきました。その中で老人介護の実態が日本と大きく異なることを実感しました。学生が実習に行く老人ホームの施設はアメニティーが低く、車椅子や寝たきりの人が入浴できる風呂はありません。そこでMKDの学生が来日して日本の介護の現状を見学することが必要と考え、学生の中から2名を巴の里へ研修に招待することを約束してきました。

簡単にできると思って約束してきたのですが、入国のための手続きが大変でありました。紆余曲折、半年かかり、やっとのことで法務省の許可が得られ今回の実現となりました。彼女たちは、ジェイド・スノウ、ハパイ・レスリーの若い二人です。7月末まで、およそ1ヶ月の研修をしました。彼女たちにとって海外旅行は始めて、当然日本も初めてです。見るもの全てが勉強で、歓迎会、

日本語のレッスン，デイサービスやユニットケアにおける日本の介護の勉強に始まり，毎日の記録のチェック，日本語日記の記載などハードな日々でした．一方，休日のホームステイ，動物園や水族館での楽しい思い出，百円ショップでのお土産，スーパーでのチョコレートの買出しなど，職員やボランティアの方々の協力で無事1ヶ月が終了しました．

これから1ヶ月間の彼女たちの研修の振り返りを，送り出し側（MKD），受け入れ側（巴の里）の両方から，受け入れ前の査証申請，研修内容，生活環境，などを多面的に検証していく予定であります．EPAとは違い，民間レベルでどのような日比相互補完ができるかを今後も模索しています．

「東日本大震災における災害医療支援に参加して」

2011. 8 院長ニュース第85巻

いわき市医師会からの要請による愛知県医師会からの医療支援チーム第17班として平成23年4月23日から27日まで、いわき市の避難所を中心に医療支援の任務に就きました。実働は4月23日夕方4時からミーティング参加から26日夕方5時の次班への申し送りまでの3日間でありましたが、現地への往復で各1日かかり、5日間の国内出張となりました。震災発生7週目での支援であったので、現地ではライフラインの復旧に続き、医療体制も回復しつつあり、避難所も縮小方向へ進んでいる状態でありました。愛知班の担当する避難所も6箇所と少なくなっており、避難所での診療も1日30名前後と減少傾向でありました。避難している方々の中でも、仕事や自宅の片付け、買い物、被災手続きなどに出かけている人が多く、日中の避難所にいる人々は実数の1-2割であり、老人と幼児が主体で、やはり弱者が取り残されていました。出発前に、避難所では医療をするというより、退屈さを和らげ精神的な落ち込みを少しでも防止できればと考えていましたので、持参した「積み木パズル」を提供することによって、子供、ご高齢の方がたとのコミュニケーションをとってきました。

今回の活動から、避難所の衛生管理と感染予防の重要性、保健師・MSW・ケアマネージャの役割が必須であることが解りました。また被災地での医療・介護・保健サービス体制を速やかに構築するためには、日頃から、行政と医師会との情報共有・連携がいかに重要であるか、が再認識できました。過疎である当地区での利点を生かした防災計画が必要と実感しました。被災地の中でも子供たちの笑顔、元気な行動が希望でした。

「ICTが田舎を救う！？」

2013. 6 県病院協会原稿

現在は天下の豊田市に属していますが、旧東加茂郡足助町にある足助病院へ赴任して、早18年目になりました。平成の合併により豊田市は、中山間地域を含むことになり、日本の縮図となりました。すなわち、都市部？と田舎との共存・共栄のあり様を考えることになりました。

診療圏は豊田市北東部の中山間地域で、その住民は約2万人、高齢化率は40%に迫り、少子高齢化の先進地域ではありますが、西三河の生命の泉である矢作川の上流の安全を確保している人々です。赴任後すぐに訪問看護ステーションが架設され、それに伴う訪問診療を行うことで、少子高齢地域で過疎、市場性がなく、かつ老人世帯、独居世帯が多い、医療サービス提供は枯渇しているという現実を知りました。これらの課題を目の前にしたとき、それを解決するのはICTだと思いました。

患者様中心を考えれば、患者様を支える医療関係の医師、看護師、薬剤師、理学療養士などだけでなく、ケアマネージャ、ヘルパー、通所介護（デイサービス）などの福祉・介護関係の人々の連携が重要です。連携には、患者情報を共有するのが効率的であると考え、患者様の医療・福祉関連のICT化した共有カルテの構築を始めました。当時の東加茂郡であった足助町、旭町、下山村、稲武町の行政、社協の担当者が一堂に会して議論したことを昨日のように思い起こすことができます。その後、ICTを利用して、在宅医療における画像・音声・生体情報の双方向通信、テレビ電話と自動血圧計・IT技術による保健事業の取り組みなど、地理的な問題解決に取り組んできました。地域で情報を一番多くもつ病院が、患者情

報を提供し易くするために電子カルテを導入し、2004年10月から連携する地域の診療所医師、ケアマネージャ、ヘルパーに対する患者様のカルテ情報を開示する地域医療連携システムを運用してきました。

2009年から厚生労働省の補助事業として、WEB型電子カルテを活用した地域診療所との医療情報共有活用事業が始まり、地域診療所の医師との連携がより密になりました。その中で明らかになったことは、診療情報を共有するためには、利用する人々の相互信頼が必須であり、その信頼の構築には日常的なコミュニケーションが重要であるということでした。そこで2010年3月から「三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会」を設立しました。会員は住民、保健・医療・福祉・介護サービス提供者、行政、各種団体で、人と人とのヒューマンネットワークづくりと議論を進めました。その中、経済産業省の「平成22年度医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業」に私たちが提案した「中山間地域における高齢者向け『いきいき生活支援』の事業化」が採択され、計画していた地域の調査研究が大きく前進しました。その結果、明らかになったことは、

1. 高齢者の独居および老夫婦のみの世帯が多く、地区によっては50%を占める地区もあった
2. 男性では85歳以上でも50%以上が自分で自家用車を運転する
3. 日常生活で困っているのは、イノシシなどの獣害が第1位で、買物や医療機関受診がこれに続いた

4. 公共交通機関は、「バス停が遠い」「バス停まで行けない」などにより利用できない住民が多い
などでありました。

そこで病院の患者様の中から希望者を会員として登録していただき、配食サービス、通院輸送サービスを3か月間実験しました。事業として成り立つのは地域の業者と提携した配食サービスであり、患者様の希望通りのデマンド方式のタクシーを利用した輸送は大赤字となりました。会員と車座の討議を重ね、平成25年正月からは、会員同士でグループを作っていただき、タクシーの割り勘乗車を実行していただいております。これを成り立たせるためには、病院側は予約診察日の便宜を図る、患者様同志はお互いに融通しあうこと、タクシー業者の協力が必要となります。すなわち患者様も積極的に参加し、協力することが必要となります。

地域住民が多く集まる病院こそ、地域コミュニティの中心であるべきであり、「開かれた病院」が目指す方向と考えています。今後も地域住民が参加しているという意識を持っていただき、かつ住民の健康維持、救急医療に役立つ活動を継続していく予定であります。新しく病院が改築されました。地域住民が集まるサロンを用意し、その運用は住民主体である形態を目指します。

「ICTが田舎を救う」をスローガンに仕事を進めてきましたが、気が付けば、ICTは単なるツールであり、人の和；SOCIAL CAPITALなしには田舎は救えないことが明白であることに気づきました。年をとっても安心・満足して暮らし続けることができる地域を目標に、地域住民のセーフティネットとして、進歩する医療・福

祉・介護サービスを提供し、かつ高いソーシャルキャピタルを有する地域となるべく、地域住民の生活を支えるコミュニティーの場となる病院を目指しています。しかし、ICTに未練は残り、中山間地域に住んでいても救急医療の場面で安心感が得られる、メディカカードの導入などを試験中であります。元気に歩いて90歳をスローガンに地域住民とともに地域の健康づくりを進めたいと思っています。

「田舎の存続にICTは役に立つか？」

2013. 7 院長会ニュース

平成の合併により豊田市は、中山間地域を抱かえ、日本の縮図となりました。すなわち、都会部と田舎との共存・共栄のあり様を考えることが必要になりました。当院は地理的には大きくなった豊田市の中心部に位置しますが、地政学的には中山間地の田舎になります。

診療圏は豊田市北東部の中山間地域で、その住民は約2万人、高齢化率は40%に迫り、少子高齢化の先進地域であります。西三河の生命の泉である矢作川の上流の安全を確保している人々です。訪問診療を行うことで、少子高齢地域で過疎、市場性がなく、かつ老人世帯、独居世帯が多い、医療サービス提供は枯渇しているという現実を知りました。すなわち、過疎、少子高齢化、文化慣習、医療介護サービス提供が少ないことが中山間地域の課題であり、それを解決するためには

ICT (INFORMATION AND COMMUNICATION TECHNOLOGY) と、それに基づく人々のネットワーク、および啓発活動が基本となるであろうと考えました。

患者様中心と考えれば、患者様を支える医療関係の医師、看護師、薬剤師、理学療養士などだけでなく、ケアマネージャ、ヘルパー、通所介護（デイサービス）などの福祉・介護関係の人々との連携が重要です。連携には、患者情報を共有するのが効率的であると考え、患者様の医療・福祉関連情報をICT化した共有カルテの構築を始めました。当時の東加茂郡であった足助町、旭町、下山村、稲武町の行政、社協の担当者が一堂に会して議論したことを昨日のように思い起こすことができます。その後、ICTを利用して、在宅医療における画像・音

声・生体情報の双方向通信，テレビ電話と自動血圧計・IT技術よる保健事業の取り組みなど，地理的な問題解決に取り組んでできました。地域で情報を一番多くもつ病院が，患者情報を提供し易くするために電子カルテを導入し、2004年10月から連携する地域の診療所医師、ケアマネージャ、ヘルパーに対する患者様のカルテ情報を開示する地域医療連携システムを運用してきました。いわゆるカルテ開示することで情報共有化を図ったのですが、カルテを見ていただけたのはごく限られた人だけでありました。診療所の先生方や看護師の閲覧はよかったのですが、医療の勉強経験の少ないケアマネージャやヘルパーさんにとって、カルテ開示の内容が不十分なせいもあって、カルテ開示への関心は低調でありました。介護関係者にとって、処方、検査データなどの生データより（判断が必要になる）、医師のアセスメントやインフォームドコンセントなどが知りたい内容であったようです。この経験により、連携に必要な知識の共通化が重要であることの認識ができ、その後の、介護関係者、住民に対する啓発活動をするものの契機となりました（現在も月1回足助村塾として継続）。

2009年から厚生労働省の補助事業として、WEB型電子カルテを活用した地域診療所との医療情報共有活用事業が始まり、地域診療所の医師との連携がより密になりました。その中で明らかになったことは、診療情報を共有するためには、利用する人々の相互信頼が必須であり、その信頼の構築には日常的なコミュニケーションが重要であるということでした。「ICTが田舎を救う」をスローガンに仕事を進めてきましたが、気が付けば、

ICTは単なるツールであり、

人の和；SOCIAL CAPITALなしには田舎は救えないことが明白であることに気づきました。

そこで2010年3月から「三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会」を設立しました。会員は住民、保健・医療・福祉・介護サービス提供者、行政、各種団体で、人と人とのヒューマンネットワークづくりと議論を進めました。

2011年には、経済産業省の「平成22年度医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業」に私たちが提案した「中山間地域における高齢者向け『いきいき生活支援』の事業化」が採択され、その研究会の活動の1つとして、計画していた地域の調査研究が大きく前進しました。その結果、

1. 高齢者の独居および老夫婦のみの世帯が多く、地区によっては50%を占める地区もあった
2. 男性では85歳以上でも50%以上が自分で自家用車を運転する
3. 日常生活で困っているのは、イノシシなどの獣害が第1位で、買物や医療機関受診がこれに続いた
4. 公共交通機関は、「バス停が遠い」「バス停まで行けない」などにより利用できない住民が多い

などの課題が明らかとなりました。

2011年10月から12月の3か月間、病院の患者様の中から、希望者を会員として登録していただき、配食サービス、通院輸送サービスを実証実験しました。その結果、事業として成り立つのは、地域の業者と提携した配食サービスであり、一方、患者様の希望通りに運行する

デマンド方式のタクシーを利用した輸送は大赤字となりました。そこで、会員と車座の討議を重ね、平成25年正月からは、会員同士でグループを作っていただき、タクシーの割り勘乗車を実行していただいています。これを成り立たせるために、病院側は予約診察日の便宜を図る、患者様同志はお互いに融通しあうこと、タクシー業者の協力が必要となります。すなわち患者様も積極的に参加し、協力することが必要となります。地域を守るためには、自分たちのことは自分たちで解決するように努力するという地域住民の意識改革が必須です。そして、このような取り組みが地域全体へ伝播（伝染）することが必要です。

地域住民が多く集まる病院こそ、地域コミュニティーの中心であるべきであり、「開かれた病院」が目指す方向と考えています。今後も地域住民が参加しているという意識を持っていただき、かつ住民の健康維持、救急医療に役立つ活動を継続していく予定であります。新しく病院が改築されました。地域住民が集まるサロンを用意し、その運用は住民主体である形態を目指します。

年をとっても安心・満足して暮らし続けることができる地域を目標に、地域住民のセーフティネットとして、
進歩する医療・福祉・介護サービスを提供し、かつ高い
ソーシャルキャピタルを有する地域となるべく、地域住民の生活を支えるコミュニティーの場となる病院を目標としています。

しかし、ICTに未練は残り、ICTは田舎を救えるか？という命題にも取り組んでいます。2012年総務省から公募された「ICT街づくり推進事業」において、

豊田市が名古屋大学、岐阜大学と共同提案した「平常時の利便性と急病・災害時の安全性を提供する市民参加型ICTスマートタウン」が委託先として決定されました。その内容は、ICTを活用した「医療分野」と「交通分野」の先進技術の融合による、超高齢社会と減災に対応できる「ICTスマートタウン」の開発を目指すものです。医療分野においては、旧東加茂郡を中心とした足助病院の患者様を対象に、ICカード（名称：あすけあいカード）を作成し、診療終了時に基本的な医療情報を書き込むことによって、近隣の診療所の医師との医療情報の共有化と、救急隊の救急活動に反映させることが出来るというものです。試用は2013年3月から開始。現在853名の患者さまがカードを保持しています。ICカードに書き込める医療情報量は多くありませんが、かかりつけ病院名、患者属性、既往歴、投薬内容、アレルギー、感染症の有無、緊急連絡先、介護認定情報、その他の診療情報（200語ほどのサマリー）であります。このカードに関する救急隊員の評判は良く、また、持っている患者様は9割以上の方が常時携帯しており、安心感が得られるとアンケートに答えられました。原稿を書いている6月末までに（2か月半で）救急搬送時に5名の方がカードを利用されました（月2名： $2 / 853 = 0.23\%$ ）。今年度はカードを3000枚増やし、かつカードをエントリーキーにして、当院のヒューマンブリッジシステムを利用して該当患者の電子カルテを閲覧できるようにする方向性を検討中であります。中山間地域に住んでいても救急医療の場面で安心感が得られる、このシステムは、患者様だけでなく、医療提供側—救急隊員、高機能病院

の救急担当医師、当院の医師にとっても利点が多いものと考えています。

ICTは、やはり田舎にとって、過疎とサービス不足を補う重要なツールであります。そのソフトを利用するには、人と人との連携という基盤になれば意味がありません。言い古されたことですが、地域に暮らす人々の連携があってシステムが生きるのです。人としての信頼と、それに基づくコミュニケーション、折り合いをつけるという助け合いが、地域を存続させるのでしょうか。ICTはその“つま”でしょうか？！

都市部と田舎を含有し、日本の縮図となった豊田市で、高齢社会の先進地区として日本の近未来に希望の光をともすべく、地域住民とがんばろうと決意しています。

「田舎の病院で何ができる？！」

2013. 11 LINKED

足助病院は、へき地医療拠点病院に指定されている医療機関である。診療圏人口は多く見積もって15,000人、高齢化率は40%に届こうとする高齢社会の先進地区である。

車で30分の豊田市市街地には豊田厚生病院（606床）、トヨタ記念病院（513床）という基幹病院があるので、当院は地域密着の病院、いわゆる後方病院と呼ばれる。後方病院といわれると、専門医療・先端医療ができないので医師が集まらないといわれている。

本当にそうであろうか！　これからの高齢社会時代（当院では10年前から）、専門医療だけで人々は幸せに人生を終焉できるだろうか？人の人生の中で専門医療が必要な時は数えるほどしかない。高血圧症、糖尿病、高脂血症、高尿酸血症といった生活習慣病のコントロールが重要で、すなわち予防医療である。それに癌の早期発見のための検診を如何にうまく組み合わせるか。介護予防も含め、メタボ、ニンチ、ロコモの予防が90歳まで元気に生活する秘訣だ。

安心して暮らし続けることができる田舎を目指して、電子カルテにして10年、地域の医療、行政、福祉関係者と連携して、ICTを利用した患者情報の共有と、人と人とのつながりを大事にしたシステム構築に向けて、地域住民と一緒に取り組んでいる。楽しくないはずがないでしょ。